

☆本気で積み重ねてきたもの…

成功者の言葉しか世の中には残らないから『やればできる』が格言になる。
夢は叶（かな）わないかもしれない。
叶える為の努力は無駄に終わるかもしれない。
でも何かに向かっていたその日々を君は確かに輝いて生きていたのではないか。
それが報酬（ほうしゅう）だと思わないか。

為末 大（陸上選手）

玉陵祭が終わりました。今、校庭で3年生が体育の授業でがんばっている姿を見えています。
玉陵祭の講評で「終わりは始まり」というお話をしましたが、素晴らしい感動の1日を終え、より一層成長した心で、勉強に運動に励んでくれていますね。
行事を終えるたびに、皆さんの心がひと回りもふた回りも成長していることを感じています。完全燃焼して、もう次の日には日常の学校生活を大切にしてくれています。

上に紹介した言葉は、為末 大（ためすえ だい）という方の言葉です。

為末選手は400mハードルの選手として有名です。世界選手権で2大会連続で銅メダルを獲得し、オリンピックにも3大会連続で出場しています。しかし、もともとは400mハードルの選手ではありませんでした。実は中学生の頃は100m・200mの選手でした。

1993年の全日本中学校選手権100m・200mで優勝し、2冠を達成。ジュニアオリンピックでは、200mで日本中学記録（当時）を更新しています。また、高校では、1996年のインターハイで400mの日本ジュニア新記録（当時）を樹立して優勝。日本ジュニアでも400mで優勝。世界ジュニア選手権代表に選出され、400mでジュニア日本新記録（当時）を樹立して4位に入った素晴らしい選手です。

力のある為末選手でも、100mや200mでは全く世界に通用しないということを知らされることとなります。そして選んだのが400mハードルです。170cmとハードルの選手としては小柄ですが、器用さを生かして活躍しました。

そんな為末さんが、15年以上も取り組んできた400mハードルの試合で、陸上を始めてわずか1、2年のハードル選手に負けたことがあったそうです。相手はまだ高校生のアメリカの選手でした。「持って生まれた能力が全然違うんだ」と打ちのめされたそうです。

世界のトップアスリートでも挫折（ざせつ）を味わいます。うまくいかない時の方が多いと言います。でも、自分が目指しているものに本気で取り組んだ経験、全力を出し切った経験は、結果が出なかったとしても貴重な大切な宝物であると思います。

玉陵祭のスローガンは「輝け南中生 スポットライトは君のためにある！」でした。確かに、ステージに立った皆さん一人一人に明るい光は当たっていました。本番直前まで努力してきたことを思い浮かべてください。クラスの間などがんばってきた日々、苦しんだ日、絆を感じた瞬間、そのすべてが皆さんの輝いていた瞬間であったと思います。

結果はその時にならないと分かりません。でも、本気で取り組んだ経験は、必ず皆さんの人生に生きてくると信じています。

